南條文雄と楊仁山の典籍交換

中村　薫

第一章　日本より中国へ送られた書籍

南条文雄と楊仁山の書籍交換は、ロンドン時代から始まっていることは周知のことである。その後は両者を中心に、日本と中国の多くの仏教者の協力の下の国際的交流と発展するのである。それでは南條文雄と楊仁山との間で交換された書籍はどのようなものであったのか。じつは三ケ年以上に渡り、何度も書簡の往復が為されており、完全にすべてを把握することは困難である。ただ、近年陳継東博士のご尽力により、新たな資料も発見され、かなり明確になってきた。[1] そこで先ず楊仁山から南條文雄に注文した経典のリストを『贈書始末』・『与日本南條文雄書十』などに依って挙げれば、次の五つの仏書目録が挙げられる。

別単　十八種　（一八九一年三月・明治二十四）

甲字単　二十一種（一八九一年九月）

乙字単　六十四種（一八九一年九月）
丙字単　百十八種（一八九二年九月）
丁字単　二十種　（一八九六年八月）

このリストの元になったのは、大典顕常の目録による。『贈書始末』六編によれば、南條文雄は、

日本寛政五年癸丑は、当に貴国乾隆五十八年、西暦千七百九十三年となるべし。則ち　距すること今より一百年前、臨済宗沙門顕常号大典、天台宗沙門慈周号六如の二僧有り。将に逸書一百部を貴国に寄贈し各藍せんとし、学匠と亀鑑とを以て文章及び目録を作すとも遂に果たせず。是れ千古の遺憾と為すなり。

と述べているが如く、曾て百年前、大典、六如の二師によって中国へ一百部の内典を送るために学匠の模範となるべき目録と副簡の文が制作されたにもかかわらず、遂にそれが果たされることはなかった。そこで期せずして百年後にまた中国の楊仁山から仏教経典を求めてきたので、これこそ時機到来と思い、早速大典の目録を楊仁山に渡し、寄贈する準備に取りかかったというのである。時に一八九一（明治二四）年であった。南條文雄は、楊仁山の請求に応じるため、赤松連城、町田久成、島田蕃根、東海玄虎の四氏[2]と謀り、代購、割愛して、写本版本を問わず、送致する準備に取りかかるのである。

じつは南条文雄は、楊仁山への送致の前に沈善登からも依頼されており、一八八七（明治二十）年五月に無量寿

経義疏二冊など五部送っていたのである。その時南條文雄は、已に中国では多くの経典が紛失してしまった事実を知っていたから、なおさら典籍交流の意義の深きことを自覚していたと思われる。

そこで今われわれはその意義を確認しつつ、これより『贈書始末』『清国楊文会請求南條文雄氏送致書目』（何れも石川文化事業財団のお茶の水図書館所蔵）により、経典交流の内容を逐次明らかにしていきたいと思う。[3]

（送致目録の一番下段の数字番号・記号・名前などは、南条が中国に送ったときの書籍番号並びに寄贈者名である。従って番号のついていないのは送っていないと考えられる。何れも『贈書始末』『清国楊文会請求南條文雄氏送致書目』による）

一、別単十八種（一八九一年三月）

一、大日本校訂大蔵経目録一本　一
二、蓮門経籍録二本　十
三、七祖聖教一帙三本、中有往生論註、安楽集、善導観経疏　金陵　二
四、大経会疏十本　観経疏四本　金陵　六十五
五、科註法華経十本　日本真宗僧峻諦述　三
宋守倫註　日本翻刻　四

六、註維摩経二本　後秦僧肇註　同　五

（右十八種中之六種なり。ただし、蓮門経籍録二本は十）

維摩経義疏　五本　日本聖徳太子御制　六

大経望西沙　七本　日本浄土宗了慧述　七

大乗義章　二十三本　隋慧遠法師撰　八

閲蔵知津　二十本　明智旭彙輯　金陵　九

（右の七祖聖教以下八種は、弟に二部有り、故に各一部を寄す。五月十八日）

蔵外目録　一本（写本）　十一

因明正理門論科本　一本　十二

因明入正理論科本　一本　十三

因明三十三過本作法科本　一本　十四

法宗源　一本　十五

七十五法名目　二本　十六

七、釈摩訶衍論十二本　金陵　十七

八、阿弥陀経通讃二本　十八

九、般若心経幽讃二本　十九

一〇、弥勒六部経七本　二十
一一、成唯識論述記二十本　二十一
一二、大乗法苑義林章七本　二十二
一三、因明入正理論疏三本　金陵　二十三
一四、妙法蓮花経玄讃十本　二十四
一五、瑜伽論略纂十五本　窺基第十六巻一冊　ワ南條　二十五
一六、善導大師伝一本　二十六
一七、八宗綱要一本　二十七
一八、浄土論註顕深義記五本　二十八

二、甲字単二十一種（一八九一年九月）

（内の経籍二十一種は刻本の如し、即ち代購を求む、否な則ち人の書写を請い、工を資して幾何ぞ、先の議定を祈す）

一、無量寿経義疏二本　隋慧遠　二十九
二、観無量寿経義疏二本　同　三十

三、阿弥陀経疏一本　智頭　東海①
四、華厳経文義綱目一本　唐法蔵　東海②
五、金鋼般若経疏二本　唐窺基　東海③
六、勝鬘経宝窟三本　唐吉蔵　三十一
七、同経　述記三本　唐窺基　東海④
八、入楞伽心玄義一本　唐法蔵　三十二
九、大乗密厳経疏四本　同　東海⑤
一〇、同経　述讃三本　唐窺基　東海⑥
一一、華厳遊心法界記一本　唐法蔵　三十三
阿弥陀経義記一本　智顗　赤松手写之本　a赤松
一二、義海百門一本　唐法蔵　金陵　b赤松、東海⑦
一三、発菩提心章一本　同　e赤松、東海⑧
一四、華厳問答一本　同　三十四
一五、五教止観一本　杜順　c赤松、東海⑨
一六、華厳五十要問答一本　唐智儼　三十五
一七、一乗十玄門一本　同　d赤松、東海⑩

一八、華厳略策一本　澄観　金陵　東海⑪

一九、不空心要　不空　八十六

二〇、無畏禅要　善無畏　八十七

二一、悉曇字母表　一行　三十六

（右二十一部は皆な蔵外目録に見える）

三、乙字単六十四種（一八九一年九月）

（内の経籍六十四種、祈して各書を肆ね尋覓に向う、刻本を得るが如く即ち代購を請う）

一、無量寿経義疏一本　唐嘉祥吉蔵　三十七

二、同経連義述文讃三本　新羅憬興　七十八

三、（釋）観無量寿経記一本　法総　ル南條、⑫

四、同　疏一本　唐吉蔵　⑬

五、同　義疏四本　宋元照　三十八

六、同経正観記三本　宋戒度　三十九

七、同経扶薪論一本　同　四十

八、阿弥陀経義疏一本　元照　⑭
九、同　聞持記三本　戒度　⑮
一〇、華厳経捜玄記十本　智儼　⑯
一一、華厳経探玄記二十本　唐法蔵　A、四十一
一二、華厳経刊定記二十本　慧苑　⑰
一三、妙法蓮花経疏義記八本　梁法雲　四十二
一四、同経疏十二本　唐吉蔵　七十九
一五、同経遊意二本　同　四十三
一六、同経玄論五本　同　四十四
一七、涅槃経三徳指帰十九本　宋智円　四十五
一八、大日経疏二十本　唐一行　四十六
一九、同経義釈十四本　同　四十八
二〇、同経疏二本　唐不思議　四十七
二一、同　序一本　崔杖　⑱
二二、金剛頂経義決一本　唐不空　C、⑲
二三、仏頂尊勝陀羅尼経疏二本　宋法崇　東海⑳

二四、大般若経遊意一本　吉蔵　㉑
二五、同　広疏十本　同　㉒
二六、般若心経崆峒記三本　守千　㉓
二七、維摩経義記八本　隋慧遠　四十九
二八、同経垂裕記十本　宋智円　五十
二九、同経廣疏十四本　隋灌頂　五十一
三〇、同　略疏五本　吉蔵　㉔
三一、無垢称経疏六本　唐窺基　五十二
三二、勝鬘経義疏私鈔六本　唐明空　Ⅶ、㉕
三三、楞厳経釋要鈔六本　宋懐遠　五十三
三四、楞伽経通義六本　宋善月　五十四
三五、解深密経疏十本　円測　金陵　㉖
三六、金光明経疏十本　唐慧沼　金陵　八十
三七、梵網経戒本義疏三本　唐法蔵　五十五
三八、同　義記十本　慧遠　㉗
三九、四分律行事鈔（資持記）四十二本　唐道宣、宋元照　五十六

四〇、無量寿経論疏十四本　慧影　㉘
四一、十地論義記八本　隋慧遠　八十一
四二、中論疏二十本　唐吉蔵　八十二
四三、百論疏九本　同　八十三
四四、十二門論疏四本　同　金陵　八十四
四五、瑜伽論記四十八本　唐遁倫　五十七
四六、成唯識論枢要四本　唐窺基　金陵　八十五
四七、弁中辺論述記四本　同　五十八
四八、二十唯識論述記三本　同　五十九
四九、百法(明門)論疏一本　唐普光　金陵　六十
五〇、倶舎論記三十本　普光　九十
五一、同　疏三十本　法宝　九十一
五二、順正理論述文記二十四本　元瑜　㉚
五三、異部宗輪論述記（発軔）三本　唐窺基　金陵　六十一
五四、華厳伝記五本　法蔵　㉛
五五、纂霊記六本　慧苑　㉜

五六、禅門章一冊　智頭　B、㉝　六十二
五七、三観義一本　同　六十三
五八、悉曇字記一本　唐智広　金陵　八十八
五九、不空表制集六本　唐円照　八十九
廬山蓮宗宝鑑六冊

（その後余の代購せし書有り・九十一、九十二）

（近日東海君より左の数部を寄贈せられたり、此は楊氏の贈書に酬ひられたものである）

守護国界章三本　最澄　九十二
秘密曼荼羅十往心論十本　空海　九十三
真言十巻章十本　空海　九十四
興禅護国論一本　栄西　九十五
元亨釈書一五本　師会（錬）　九十六

（右九十六部は已に送致し了れり）

六〇、大乗玄論五本　吉蔵　六十四
観経疏四本　唐善導　金陵　六十五

法事讃二本　善導　六十六
法事讃私記二本　良忠　六十七
法事讃見聞一本　六十八
観念法門一本　善導　金陵　六十九
観念法門私記二本　良忠　七十
観念法門見聞二本　七十一
往生礼讃一本　善導　七十二
往生礼讃私記二本　良　七十三
往生礼讃見聞二本　七十四
般舟讃一本　善導　七十五
般舟讃私記一本　良忠　七十六
般舟讃見聞一本　七十七

（以上三項の書籍は、〈二十九～七十七〉の四十九部、二百八十八本、明治二十四年十月十日なり）

（別に善導著書〈六十五〉有り、及びその註解十三部〈六十六～七十六〉二十三本、此の中、最初の観経疏は、楊君の要求せられる別本なり。今之れ不可分なるが故に全部購得す、分けて二十三本左（右））

六一、勧発菩提心集三本　慧沼　XI、㉞

六二、雑集論述記十　窺基　㉙

（右六十一部見于『蔵外目録』）

六三、往生浄土論六本　道安　㉟

六四、廬山集十本　慧遠　㊱

（右二部は『蓮門経籍録』に見られる）

四、丙字単百十八種（一八九二年九月）

阿弥陀経義疏一冊　隋元照　（一）

一、阿弥陀経疏二冊　唐窺基　（二）

二、同　義疏　唐善導

三、妙法蓮花経義決一本　唐慧沼

四、同　玄讃十本　唐窺基

五、仁王般若経疏三本　唐嘉祥吉蔵　（三）

六、同　疏四本　唐円測　（四）

七、同　疏七本　良賁
八、同　法衡鈔六本　遇栄
九、金鋼般若直解一本　唐慧能
一〇、同　六祖解義二本　唐普覚
一一、維摩経略疏十本　隋智顗
一二、同　玄義三本　同
一三、同経記二本　唐湛然
一四、同　広疏六本　唐吉蔵
一五、同　遊義一本　同
一六、楞厳経集解薫聞記六冊　宋仁岳
一七、弥勒上生経疏二冊　唐窺基
一八、同　新記二本　宋元照
一九、金光明経順正記三冊　宋従義
二〇、同経疏一本　唐吉蔵
二一、薬師本願功徳古跡二冊　太賢
二二、梵網経述記四冊　唐勝庄

(6)
(五)
(七)　リ島田
(六)
(八)
(九)
(一〇)
(一六)
(一一)
G、
(7)

二三、同　疏証三本　宋与咸　D

二四、同　疏三冊　義寂　H、(8)

二五、同　注二本　智因

二六、同　古跡記二冊　太賢　金陵　（一二）

（四分律含住戒本疏二冊　道宣）　（一三）

二七、四分律律妙批二八本　太覚

二八、同　済縁記八冊　宋元照　（一四）

二九、同　行宗記八冊　同　（一五）

（此の三部は不離の故に今戒本疏を加える）

三〇、同　飾宗記十本　定賓

三一、十地論疏一本　唐法蔵

三二、同　玄義一本　唐吉蔵

三三、十二門論疏宗致義記二冊　唐法蔵　（一七）

三四、法華論疏十三冊　唐吉蔵　（一八）

三五、瑜伽論略纂十六本　唐窺基

三六、応理宗戒図十三本

三七、成唯識論演秘十四冊　唐智周　（二一）
三八、同　義蘊七本　道邑
三九、同　義演十三本　如理
四〇、同　古跡八本　亡名
成唯識論枢要四本　唐窺基　金陵　八十五、（一九）
四一、同　了義灯十三冊　慧沼　（二〇）

（此れ唯識三箇疏と為す故に枢要を加える、〈一九〉、〈二〇〉、〈二一〉）

四二、因明入正理論義断一本　慧沼　Ⅱ
四三、因明前記二本　智周
四四、同　後記二本　同
四五、同　纂要二本　慧沼　Ⅲ
四六、俱舎論疏五冊　神泰　Ⅰ、(9)
華厳一乗分斉章義疏五冊　道亭　J、(10)
四七、俱舎論頌疏十四冊　円輝（暉）　（二二）
四八、同論記十二冊　遁麟　（二三）
四九、同論鈔六冊　慧暉　（二四）

五〇、同　序記一本　法盈
五一、遺教論住法記二冊　宋元照　（二五）
五二、釈群疑論七冊　唐懐感　（二六）
五三、遊心安楽道一冊　元暁　（二七）
五四、無量寿讃十一本　宋元照
五五、義苑疏十本　宋道亭
五六、五教章復古記六本　師会
五七、集成記六本　希迪
五八、析薪記二本　観復
五九、焚薪二本　師会
六〇、華厳経骨目二冊　唐湛然　（二八）
六一、発微禄一冊　宋浄源　（二九）
六二、賢首伝一冊　新羅崔致遠　（三〇）
六三、大乗止観法門宗円記五本　宋了然
六四、玄妙門一本　隋智顗
六五、法華伝記三冊　唐増祥　（三一）

金陵

Ⅳ

Ⅴ

六六、増修教苑清規四冊　隋自慶　（三二）
六七、法門大義一本　晋羅什
六八、二諦章三冊　唐吉蔵
六九、決択章二本　唐智周
七〇、法苑補闕章三冊　唐慧沼　（三三）
七一、慧日論四冊　同
七二、四分律比丘尼鈔三本　唐道宣　（三四）
七三、仏制六物図一　宋元照　（三五）
七四、義楚六帖二六冊　宋義楚　（三六）
七五、祖庭事苑二冊　宋善郷　（三七）
七六、芝園集三本　宋元照　カ南條

（以上七十六種は蔵外目録に見える）

七七、八宗綱要講解六（和文）福田義道　K、(11)
七八、浄土源流章一冊　凝然　（三八）
七九、略述法相義三冊　聞証　（四〇）
八〇、三国仏法伝通縁起一冊　凝然　（三九）

八一、称讃浄土経駕説四冊　月筌　L、

八二、易行品冠注　単冏　(12)　VI

（以上六種は西村空華堂書目に見える、是れ支那文、即ち代購を請う）

八三、三談玄義二冊　吉蔵　(四一)

八四、阿毘達磨倶舎論図一（枚摺）大嶺　VII

八五、諸宗総係譜図一（枚摺）大嶺　viii

八六、唯識略解十冊　古蔵　(四二)

八七、法苑義鏡四冊　善珠　(四三)

八八、華厳五教章（傍注）一冊　法蔵　(四四)

八九、同　冠注十冊　観応　(四五)

九〇、華厳孔目章四冊　智儼　M、

九一、悉曇蔵四本　安然　(13)　(四九)

九二、悉曇揃五本　E、

九三、法相大乗玄談二本

九四、起信論義記三冊　法蔵　(四六)

九五、同　別記一冊　賢首　N、(14)

九六、同　海東別記二冊　元暁　Q、(15)
九七、同　海東疏二冊　同　（四七）
九八、同　慧遠疏二本
九九、同　一心二門大意一本　智顗　IX
一〇〇、同　教理抄十冊　湛睿　（四八）
一〇一、略摂八転義一冊　法住　（五〇）
一〇二、釈浄土群疑論
一〇三、律宗綱要一本　凝然　X
一〇四、八宗論一本　（和文）
一〇五、仏法簡要捷径録二本（和文）
一〇六、梵網経要解六本　同
一〇七、書籍目録六本　同　P、(16)
一〇八、日本往生全伝六冊　（五一）
一〇九、迦才浄土論三一冊　迦才　Q、(17)
一一〇、雑集論述記十冊　R、(18)
景祐天竺字源

（以上二十八種は、文昌堂蔵版目録に見える。是れ支那文、即ち代購請う）

一一一、華厳隋文手鏡一百本　唐証観

一一二、禅源語経集　宗密（蔵内の右序僅かなり、比の集に約数十本有り。貴国に有存するは請購の一部の如し）

一一三、楞伽経疏七本　唐法蔵（入楞伽心玄義の代購を承るは、即ち此疏の前なり）

一一四、法華経疏七本　同

一一五、法界無差別論義疏一冊　同　（五二）

一一六、華厳策林一本　同

一一七、同　三昧観一本　同

一一八、華蔵世界観一本　同

（以上一一三～一一八の六種は賢首伝に見える）

（右丙字単内の（一）～（五二）部合計二百四十三冊なり。右は壬辰（一八九二年）九月二十五日）

附、その他楊仁山の請求にはなかったけれども送致した書籍を左に掲げると次の如くである。

一、華厳行願品疏鈔併科文　七冊　澄観

二、十二門論疏　四冊　窺基

三、因明論大疏三冊　窺基　ロ赤松
四、因明大疏瑞源記八冊　窺基・鳳譚　タ南條
五、因明論十題二冊　宋知礼　ハ赤松・レ南條
六、四明十義書　宋知礼
七、大唐内典録八冊　道宣
八、四分律含住戒本疏二冊　道宣
九、梵語千字文一冊　義淨
一〇、五会法事讃一冊　法照　イ赤松
一一、羯磨疏八冊　唐南山　ヨ南條
一二、景佑天竺字源三冊写本　賛寧
一三、僧史略一冊　賛寧　金陵　ト赤松
一四、四書籍益解一冊　智旭
一五、倶舎論疏四冊写本　神泰
一六、略述法相義三冊　聞証
一七、選択決疑針　五冊　良忠
一八、起信論義疏　五冊　良忠　ネ南條

一九、大乗対倶舎鈔　一四冊　源信　　ヌ島田
二〇、顕戒論　三冊　最澄
二一、講演法華儀　二冊　円珍　　ソ南條
二二、日本往生全伝　六冊
二三、成唯識論義蘊　二冊　道邑
二四、阿毘達磨倶舎図　一枚　大嶺
二五、観心覚夢抄三本　良遍　　f赤松
二六、護法漫筆一本　松平冠山　　g赤松
二七、続日本高僧伝　二冊　道契　　チ赤松
二八、阿弥陀経幣帛録　三冊　慧鐺　　ニ赤松
二九、辟邪集　二冊　　ホ赤松
三〇、辟邪集管見録　二冊　　ヘ赤松
三一、蔵外目録　一冊写本　　十一
三二、航西詩稿　一冊　南條文雄
三三、龍蔵目録一本　　h
三四、法輪寶懺八本　　i

（此の書已に全蔵提要するが故、或は閲蔵に属し津之類と知る、果然の如く則ち一本請恵す）

三五、釋教最上乗秘密蔵陀羅尼集三十六本　行琳　㊲
三六、法苑義林西玩記六本　窺基　㊳
三七、因明入正理論過類疏一本　同　㊴
三八、百法明門論決頌一本　同　㊵
三九、大乗瑜伽劫章頌一本　同　㊶
四〇、新編随願往生集二十本　非濁　㊷
四一、百法論疏二本　義忠　㊸
四二、大方広仏華厳経疏随品讃十本　御制　㊹
四三、大方広仏華厳経論百本　霊辨　㊺
四四、広品歴章三十本　玄逸　㊻
四五、金剛宜演疏六本　道氤　㊼
四六、瑜伽師地論帙記二十本　崇邁　㊽
四七、法論十六百三本　宋明帝勅中書伺郎陸澄撰　㊾
四八、神変疏鈔　㊿
四九、曼孥羅疏鈔　(51)

（右の外晋の道林、道生の顕す所の諸論の名を記して、切に之を得んことを楊氏より請い来れり、其書信は今は余の許に無し、故に其諸論の名を記すること能わず、之を要するに漢土の諸師の著述にして其書目を知りて其書を見ること能わざるより求めくることなれば、願わくば其望に副い、併せて本邦の大乗相応の法城たることをも知らしめんと欲する而已、顕常、慈周二師は百年前に自ら発起して貴贈せんとせしも、時未だ至らずして止めり、今や彼土より求め来る、豈時機純熟の秋と謂わざるべけんや、故に課余に筆を奔して此贈書始末を記し、余の知己者に示すこと爾り、時維明治二十四年十二月五日夜、東京麹町区元園町爪雪処に識す（完結））『贈書始末』第一編

五、丁字単二十種（一八九六年八月二十日）

（『与日本南條文雄書十』『贈書始末』第八編による。「丁字単を求とめ代購するは章疏開列の後なり」）

一、法華五百問論三巻　湛然　刻本　南條1

二、略止観六巻　梁粛（世に刪定止観と称す）　刻本　南條2

三、禅門要略一巻　智者　赤松・前田2

四、随自意三昧一巻　台山（此れ恐らくは縮刷大蔵経陽帙第四巻天台宗章疏第二法華経安楽行義と同本、仏祖統起南岳伝に南岳安楽行義を随自意安楽行と為す故に云う）

五、金剛般若疏二巻　窺基　　未詳其存否1
六、般若心経疏一巻　靖邁　写本　　南條6
（右六部南條文雄贈呈）
七、対法論鈔七巻　窺基　　未詳其存否2
八、華厳雑章門一巻　法蔵　（此れ貴贈三宝章等七章と同じ故此を省く）
九、三聖円融観一巻　澄観　刻本　金陵　　赤松・前田1
一〇、心要一巻　澄観　合巻・写本　　赤松・前田3
一一、五蘊観一巻　澄観　　未詳其存否3
一二、金剛般若略疏一巻　智儼　　未詳其存否4
一三、註金剛般若一巻　僧肇　（謄写にて将に成ずべし）
一四、龍女成仏義一巻　源清　金陵　　赤松・前田4
普賢観行法門　法蔵　合巻　写本　　赤松・前田5
（赤松君云く、普賢願行法門は丁字単内所に記せず、以て其れ法蔵に係わると作すが故に之を加える）
（以上十四種、諸宗章疏に照らし、録内硃圏有る者を録出す）
一五、金七十論校註三巻　　南條3
一六、起信論校註一巻　　南條4

一七、八宗綱要考証二巻　南條5

（以上三種東華和尚著述）

一八、大乗起信論義記　法蔵　未会合の本　未詳其存否5

一九、観無量寿佛経疏　元照　未会合の本　未詳其存否6

二〇、大乗密厳経疏三巻　法蔵（此の書原に四巻有り、現存此写本にして、その第一巻を缺す、未だ謄写を成ぜず）

以上送致した典籍の目録をまとめてみると次のようである。

一、（右甲単内の①～⑪は楊氏の甲字単内の書なり）

二、（右二十九～三十六の八部は同じく甲字単内の書なり）

三、（右a赤松～e赤松の五部は閣下の甲字内の未得の書なり）

四、（右　ワ南條、a赤松～e赤松、東海①～東海⑪とは、南條文雄、赤松連城、東海玄虎の各氏が購入して別に送ったものである）

五、（乙字A～Cは乙字単内の書）

六、（右三十七～六十四の二十八部は乙単内の書なり）

七、（右乙単⑫～⑳、㉑～㊱は、楊氏の乙字の単内の書なり）

八、丙字単内の⑹～⒅は、十八部八十八冊なり。（一〇月十二日）

九、（一～十は右甲字単内の書なり）

十、（三十七～六十四の二十八部は乙単内の書なり）

十一、（右丙字単イ赤松～チ赤松の八部は、赤松連城君寄贈）

十二、（右丙字単の島田リ・ヌ島田の二部は、島田蕃根君寄贈合計二十部七十三冊三月二十六日『贈書始末』第六編）

十三、（右丙単の南條ル～南條ネの十部は南條文雄寄贈）

十四、（以上右丙単のイ～ネ二十部は七十三冊也）

十五、（右㊲～㊶は、十二月五日）（『贈書始末』第八編）

十六、（右A～Rの十八部八十八冊は十月十二日）（『贈書始末』第三編）

十七、（右Ⅰ～Ⅶの十部二十九冊、並びに図二枚の合計十二部は十一月十日）（『贈書始末』第三編）

十八、（aないしlの中、fgは日本人の著者、a～eの五部甲単内の未得の書ですべて十二部は、十二月四日送致（『贈書始末』第四編）。なおj～lの三部は楊仁山から送られてきているのでそちらの方に入れた。

十九、（金陵とあるのは金陵経刻所で翻刻されたものである）

なお、一八九二年十二月十六日時点で、南條文雄は、

甲乙丙、及び別単書目の中で、未得者は、尚六十四部。東西二京に書肆を切して之れ　有らず。今後当に得に随い贈に随うなり。

と述べているが如く、東京と京都の本屋で探しても六十四部が未だに入手困難で有るが、今後入手次第送るつもりであるというのである。たまたま丁字単の書籍の送致は、一九九六年八月であった。それでもこの時点で百六十種近くが送られたことになる。

第二章　中国より日本へ送られた書籍

（一八九一年八月二日　奉贈経五十本、左に開列する）

一、夢遊集二十本
二、観楞伽記四本
三、起信論纂註一本
四、起信論直解一本
五、居士伝六本
六、善女人伝一本

七、老荘註解四本
八、一行居士集四本
九、中庸直指一本
一〇、仏爾雅一本
一一、肇論略註二本
一二、円覚経近釋一本
一三、心賦註四本

（一八九一年九月二十六日）

一四、閲蔵知津十本
一五、六妙法門、入梅伽心玄義　一本
一六、弥陀疏紗　五本
一七、竜蔵目録　一本
一八、徽墨四盒
一九、茶叶四瓶

（以上一四～一九は南条文雄宛）

k　j

二〇、閲蔵知津　十本
二一、六妙法門、入梅伽心玄義　一本
二二、徽墨四含
二三、茶叶四瓶
二四、弥陀疏紗　五本
（以上二〇～二四は東海玄虎宛）
二五、竜蔵目録
二六、法輪宝懺　八本
二七、中庸直指　一本
二八、仏爾雅　一本
二九、四書小参　一本
三〇、藕益四書解　三本
三一、閲蔵知津　十本
三二、弥陀疏鈔　五本
三三、六妙法門、入楞伽心玄義　一本
（以上二五～三三は赤松連城宛）

三四、往生論注附略論浄土義讃阿弥陀仏揭　日本刊本翻刻　金陵　魏曇鸞著
三五、勝鬘経疏鈔三冊　日本上宮太子疏　金陵
三六、無量寿経義疏　日本刊本翻刻　金陵　隋慧遠撰
三七、観無量寿経四帖疏会本　日本刊本翻刻　金陵　唐善導集記
三八、安楽集　日本刊本翻刻　金陵　唐道綽撰
三九、三論玄義　日本刊本翻刻　金陵　唐吉蔵撰
四〇、成唯識論述記上下二函二十冊　日本刊本翻刻　金陵　唐窺基撰

（以上三四～四〇は、先に送ったものを再度翻刻して送られてきた書）

四一、華厳十明論　一本
四二、弥陀要解　一本
四三、華厳決疑論　二本
四四、三経約論　一本
四五、華厳呑海集　一本
四六、竜舒文　二本
四七、華厳要解　一本

四八、念仏警策　一本
四九、賢首五教儀　二本
五〇、浄土聖賢録　六本
五一、五教開蒙　一本
五二、楽邦文類　五本
五三、御選語録　十四本
五四、梵室徹悟　一本
五五、禅林僧宝伝　三本
五六、西帰直指　一本
五七、智証伝　一本
五八、西方公據　一本
五九、高峰語録　一本
六〇、紫柏集　十本
六一、禅源諸詮序　一本
六二、続原教論　一本
六三、林間録　二本

六四、一乗決疑論　一本
六五、妙玄節要　二本
六六、浄土十要　四本
六七、楞厳合轍　十本
六八、浄土指帰　二本
六九、金剛決疑　一本
七〇、省菴語録　二本
七一、金剛宗通　二本
七二、念仏百問　一本
七三、金剛破空　一本
七四、東林高賢伝　一本
七五、梵網合註　五本
七六、式本箋要　一本
七七、四十二章三経解　一本
七八、四十二章仏道教守遂註　一本
七九、帰元鏡　一本

八〇、楞厳蒙鈔　二十本
八一、釈氏稽古略　五本
八二、選仏譜二本附図一枚

（以上四一～八二の四十二部一百二十三本、図一枚は、南條文雄に奉贈）

八三、起信裂網疏　二本
八四、法句経　一本
八五、翻訳名義集選　一本
八六、造像量度経　一本
八七、道徳経解　二本
八八、荘子内篇註　二本
八九、無量寿三経論　一本
九〇、一切経音義　四本
九一、釈迦仏坐像一張
九二、霊山法会一張

（以上八三～九二の八部十四本又図二張は、赤松連城に奉贈）

九三、御選語録　十四本
九四、宗鏡大綱　五本

（以上九三・九四の二部十九本は、島田蕃根に奉贈）

大小乗釈軽部

九五、楞厳経集注（十本）　宋思坦　懐寧叶子珍
九六、楞厳秘録（十本）写本　一松　石埭楊文会
九七、法華大窾（八巻）摺本　明通潤　四川僧玉
九八、法華文句纂要（十四巻）　清道霈　石埭陳鏡清
九九、法華大成（九巻）　清大義　金陵秦谷
一〇〇、法華玄讖証釈（十巻）　智　詮　天台僧敏義
一〇一、金剛経疏記科会（十巻）　唐圭峰疏　宋長水記
明大　科会　石埭陳鏡清
一〇二、金剛三昧経通宗記（十二巻）　清　震　金陵費蓉生
一〇三、大乗本生心地観経浅注（八巻）　清来舟　揚州尼宝来
一〇四、観無量寿仏経疏鈔会本（三巻）　智者疏　知礼鈔

一〇五、四十二章終疏鈔（五巻）　明真覚会巻　金陵尼円音
一〇六、金剛経輯（二巻）　清続法　金陵尼円音
一〇七、金剛経演古（一巻）　明広伸　金陵僧空浩
一〇八、心経略疏小鈔（二巻）　清寂焔　金陵僧彼岸
唐法蔵疏明銭謙益鈔　杭州僧一願

犬小乗釈律部

一〇九、梵網経直解（四巻）　明寂光　石埭楊文会

大小乗釈論部

一一〇、大乗起信論続疏（二巻）写巻　明通潤　石埭楊文会
一一一、成唯識論集解（十巻）　明通潤　石埭楊文会

法相宗著述部

一一二、唯識開蒙二巻　元云峰　揚州釈観如

律宗著述部

一一三、毘見関要十六巻　清徳基輯　金陵釈月霞
一一四、四分戒巻約義四巻　清元賢述　金陵釈空浩
一一五、沙弥合参三巻　清済岳彙箋　揚州釈清梵

浄土著述部

一一六、角虎集二巻　明済能　金陵釈彼岸

禅宗著述部

一一七、宗鏡録具体二十四巻　明陶爽齢刪明史孝復記　石埭女士明悟
一一八、宗門占古彙集四十五巻　清浄符彙集　石埭女士深
一一九、馬祖百丈黄檗臨済四家語録六巻　明解寧刻　石埭楊文会
一二〇、万峰蔚和尚語録一巻　明普寿集　石埭楊文会
一二一、笑岩宝禅師南北東二巻　明曇芝編輯　明真景記録　石埭楊文会
一二二、先覚集二巻　清陶明潜輯　石埭楊文会

史伝部

一二三、釈氏通鑑十二巻　宋本覚　秋浦女士郎宛卿

一二四、南宋元明僧宝伝十五巻　続禅林僧宝伝後　清自融　杭州沈明哉

一二五、補続高僧伝二十六巻　明明河　北京龍泉寺

一二六、五灯全書百二十巻　清超永編輯　石埭楊文会

雑著部

一二七、仏法金湯征文録十巻　明姚希孟輯　高郵釈普航

増寄釈典六種

一二八、御制　東魔辨異録四本　雍正皇帝　普陀僧印光

一二九、金剛般若経解　一本　唐慧能　長沙曹顕宗

一三〇、法華撃節　一本　明徳清　石埭楊文会

一三一、華厳合論簡要　二本　明李贅　石埭楊文会

一三二、仏祖宗派世譜　二本　清悟進　焦山僧昌道

一三三、徹悟禅師語録　一本　清際醒

（以上九十五～一三三の三九部は、蔵経書院へ寄贈）

以上で明らかなように、楊仁山から日本に送られてきたものは、明清時代の日本ではこれまで見ることが出来なかった仏教以外の典籍（但し経典は『法句経』『造像量度経』のみ）も含め一三三種である。[4] そして、南条文雄と楊仁山の書籍交換は、単に両名の個人的交流にとどまらず、日本からは赤松連城、島田蕃根、東海玄虎、中野達慧、中国からは金陵、廬山、揚州、四川など各地の僧侶も加わり、日中の仏教交流にに発展するものであった。

今、南條文雄と楊仁山の書籍交換に関しては、大日本続蔵経の編纂委員の中野達慧も

先ず是れ南條博士を介して金陵仁山楊君に請うて秘籍を捜訪す。未だ幾して得ずして浙寧廬山寺の式定禅師と法門の交を結び、雁魚往来すること幾十回か知らず。二公皆此の挙を嘉ぶ。或いは親自ら検出し、或いは人を派し旁捜し、以て目録未収の書を集め而も寄送されることを見ば、前後数十次、幸にして多くの明清両朝の仏典を獲る。予一書に接する毎に歓喜頂受するは趙璧を獲た如くで、礼拝薫誦し、釋手に忍ばざるなり。[5]

と述べているように、先ず楊仁山の献身的な業績をたたえている。大日本続蔵経編纂の時には、南條文雄を通して、楊仁山からなかなか入手困難な珍しい書物を送ってもらった。そして更に廬山寺の式定禅師との出会いを通して中国の禅関係の典籍も送って貰い、その間書簡の往復は何十回であったという。中野達慧は、楊仁山と式定禅師の二

公により、それまで日本には無かった明清両時代の貴重な典籍を何十回となく送って貰ったことに深く歓喜を以て感謝しているのである。

最後に意外であったことは、南條文雄等から送られた経典の内、二十一部の経典が金陵刻経所で翻刻されたのみである。もとより法然親鸞の著書の翻刻は、楊仁山の教理上できなかったかもしれない。前掲の三四の浄土論註より四〇の成唯識論述記を日本に送ってきたが、それにしても金陵経刻所の翻刻を少なく感じるのは筆者のみであろうか。

註

(1) 陳継東博士著『清末仏教の研究』の資料篇のⅠ『学窓雑録』、Ⅱ『贈書始末』、Ⅲ『清国楊文会請求南條文雄氏送致書目』参照。じつは、特にⅡ『贈書始末』、Ⅲ『清国楊文会請求南條文雄氏送致書目』の二書は、石川文化事業財団のお茶の水図書館のご厚意で閲覧を許されたが、限られた開館時間と、名古屋の遠隔地からの閲覧は不便を感じていた。そんな中、陳継東博士のご尽力により公開され、大いに学恩に付すことができ感謝している。

(2) 赤松連城（一八四一～一九一九）は、浄土真宗本願寺派の僧。ヨーロッパ留学の後、島地黙雷らと本願寺改革運動を断行する。町田久成（一八三八～一八九七）は、幕末の薩摩藩士で、イギリス留学の後東京国立博物館の初代館長に就任。後出家して三井寺光浄院住職となる。島田蕃根（一八二七～一九〇七）は、仏教学者。弘教書院を設立し、『縮刷大蔵経』を刊行。東海玄虎は佐藤茂信と改名。詳細不明。いずれにしても南條文雄の交友の広さが知られる。

(3) 南條文雄と楊仁山との書籍交流については 前掲『清末仏教の研究』「第三章南條文雄らとの交流」に詳しく論じられている。

(4) これらの交流の経緯については、陳継東氏が詳しく調査して報告している。前掲『清末仏教の研究』の第三章「南條文雄らとの交流」の第二節「日本伝来の仏教典籍」の第一項「『清国楊文会請求南條文雄氏送致書目』と楊文会の四つの書目」

（一四八頁）と第二項「南條文雄らへの送致書目」（一五七頁）と第三節「南條文雄への寄贈書目」の第一項「『贈書始末』における楊文会からの送致書目」（一六〇頁）と第二項「日本『卍続蔵経』と楊文会」（一六七頁）をそれぞれ参照。

(5)『大日本続蔵経総目録』（一九六七年・蔵経書院）四十二～四十三頁

付記、今回の論文作成に当り、石川文化事業財団のお茶の水図書館には大変お世話になった。また資料蒐集に当り同朋大学非常勤講師の藤村潔氏にご協力頂いた。記して謝意を表す。